The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜追悼文＞池田温先生を偲んで
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	内陸アジア言語の研究. 2024, 39, p. 125-129
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100262
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

内陸アジア言語の研究 39, 2024.9, 125–129

＝ 追悼文 ＝

池田温先生を偲んで

荒 川 正 晴*

唐代史および敦煌・トゥルファン文書研究の泰斗である池田温・東京大学名誉教授が，2023 年 12 月 11 日に 92 歳で逝去された．先生が積み重ねてこられた膨大な御業績については，「学問の思い出」（『東方学』123, 2012, pp. 172–215）に付載されている主要著作目録（大津透編）(1)から窺い知ることができる．私などは精緻な文書研究のお仕事に目が奪われがちであるが，あらためて先生の研究テーマの幅広さを痛感する．まさに碩学であった．それにも拘わらず，先生は学生であっても大変に慇懃に接せられ，相手の肩書や立場によって態度を変えられることは一切されなかった．私が院生として初めてご挨拶を申し上げたときに，先生の丁寧なご対応にとても困惑したことを良く覚えている．ただこれは先生のご研究の姿勢と密接に関わっており，内輪の同人誌的な場での成果であろうとも，公刊された学術論文として分け隔てることなく受け取られ，一様に厳しく評価された．驚嘆したのは，先生と一面識もない時にいきなり送り付けた拙論に対してさえも，すぐに読まれて礼状を返され，真摯に論評して下さったことである．有難いことに微細な点まで含めて，逐一，誤りを正されるとともに，私が見落としていた史料・論文までもご教示頂いた．先生のもとには常に数多くの論著が謹呈されていたと思うが，すべてに目を通され，同じように対応されていたと思うと，本当に敬服の念を禁じ得ない．如何なる研究に対しても敬意をもって接し，自らが有するすべての情報を惜しみなく共有されようとしたのも，先生の我欲とは無縁の純真な研究姿勢を体現するものであろう．このことと深く関連するが，日本の東洋史の研究者で先生ほど多くの関係書籍の評論や紹介を執筆された先生はあまりおられないのではないかと思う．

唐代史や律令に関わる畏敬に価する先生の重要なご功績については，先生との思い出とともに多くの東洋史関係の雑誌（『東方学』『唐代史研究』など）で相応しい人選のもとで追悼文が掲載されているので，ここでは内陸アジア（中央ユーラシア）史研究という視点から，あらためて先生を追悼することをお許しいただきたい．

中国史研究者である先生が内陸アジア地域への関心を深められたのは，何といっても敦煌やトゥルファンから出土・発見された漢文文献を先生のご研究の柱の一つに据えられたことであったことは疑いない．長年にわたり我が国の敦煌・トゥルファン学を牽引されてこられ，日本が敦煌学をリードしていた黄金時代を支えたお一人でもあった．その令名は中国・台湾の関係学界に鳴り響

---

* 大阪大学名誉教授（ARAKAWA Masaharu. Professor Emeritus, The University of Osaka）

(1) 大津透氏は，既に池田温先生の古稀記念論文集である『日中律令制の諸相』（東方書店，2002 年）において「池田温著作分類目録」を作成されている．

いており，日本と中国・台湾の敦煌・トゥルファン研究の交流の中核的な役割を果たしてこられた．そのことは，『澎湃』に載せられた 3 名の先生方（趙声良・栄新江・高明士）の「池田温先生追悼文」が，先生の輝かしいご業績の紹介とともに，言葉を尽くして伝えている．

周知のように，敦煌・トゥルファン学は前世紀以来の長い研究の伝統をもっているが，日本における同研究の大きな画期となったのは，1950 年代に入って大規模なスタイン敦煌文献のマイクロフィルム化事業が始められたことであろう．山本達郎教授や後に東洋文庫長となられた榎一雄教授のご尽力により，スタイン敦煌文献のマイクロフィルムが東洋文庫にもたらされ，その焼き付け写真が東洋文庫だけでなく，京都大学の人文科学研究所にも配置された．これにより，日本ではそれまで個別的なある種「宝物探し」的なところがあった敦煌・トゥルファン文献研究が，文献全体を見渡したうえでの，ある程度組織立ったものになり，これが大きく日本の敦煌・トゥルファン文献研究の質を向上させ，かつ研究層の拡大と諸分野への広がりに繋がっていった．こうした研究環境の大きな変化の中から現れた，新たな世代の敦煌・トゥルファン研究者を代表する一人が池田先生であった．

先生は，文書研究が新たなステージに移行してゆく最中の 1956 年に東京大学大学院人文科学研究科の博士課程に進学され，続く 1957 年秋に東洋文庫の研究生になられている．先生は，その後，1961 年 11 月には東京大学文学部の助手（東洋史研究室）に就かれているが，その間，文庫にもたらされたマイクロから新たに写真を焼き増すにあたり，その点検作業に従事されるとともに，併せて自ら関心を懐いた文書史料について個人的にノートを取られており，これが先生の敦煌・トゥルファン文献研究の始まりとなった．この時のノートは，1964 年に菊池英夫先生と一緒に編集された東洋文庫敦煌文献研究委員会編『スタイン敦煌文献及び研究文献に引用紹介せられたる 西域出土漢文文献分類目録初稿：非佛教文献之部 古文書類 I』として結実している．この目録稿は，敦煌だけでなくトゥルファンの社会・経済関係の文書に関する貴重な指南書的な著作となった．ちなみにこれに続いて作成された寺院関係文書については，土肥義和先生により，1969 年に東洋文庫敦煌文献研究委員会『スタイン敦煌文献及び研究文献に引用紹介せられたる 西域出土漢文文献分類目録初稿：非佛教文献之部 古文書類 II（第 2 分冊）』として出されたが，池田先生もその作成に助力されている．

その後，先生は，1971 年に北海道大学文学部より東京大学東洋文化研究所に移られると，1976 年 10 月には東洋文庫の兼任研究員に就かれたが，この同じ年に東洋文庫で今に至るまで続く内陸アジア出土古文献研究会が始められている．山本達郎先生が主催される研究会という印象は強かったものの，実質的な運用に携わっていたのは池田先生や土肥先生などの当時，中堅の敦煌・トゥルファン研究者たちであった．記念すべき第 1 回研究会は，土肥義和先生の「敦煌戸籍の園宅地」であったが，この研究会では歴史分野では中国史だけでなく，当初より内陸アジア史の分野にも関心が寄せられており，第 2・3 回は梅村坦氏により，また続く第 4 回は森安孝夫氏がウイグル文書やウイグル史関係の報告を担当されている．後に 1982 年度の研究会（11 月 20 日）では，私も中国・新疆で出版された新刊の書籍を紹介している．

1978 年になると山本達郎先生の主編のもとに，英文解説文付きの敦煌・トゥルファン文書の資料集である *Tun-huang and Turfan Documents Concerning Social and Economic History* の刊行が始まり，続く 1979 年には池田先生自身のご高著である『中国古代籍帳研究：概観・録文』（東大出版会）が上梓された．さらに，日本の敦煌研究の充実ぶりを端的に示したのが，池田先生も編者として名を連ねている『講座敦煌』全 9 巻（大東出版社, 1980–1992）の企画・出版である．このうち 2 巻（『敦煌の社会』『敦煌漢文文献』）で先生が責任編集者となられている．

また先生は，本務先である東京大学東洋文化研究所では講義やゼミなどを受け持つことはなかったが，東京大学大学院入文科学研究科の担当でもあったことから，院ゼミとして敦煌・トゥルファン文書を検討する演習が開講されていた．東大の院生であった森安氏や他大学の院生ながら梅村氏や関尾史郎諸氏などもこのゼミに出席されており，私も 1981 年 4 月より非正規のかたちで参加することを許して頂いた．この時は新中国で発掘されていたアスターナ古墓群出土のトゥルファン文書の整理作業が進展し，その録文が刊行され始めた頃で，演習題目は「吐魯番出土文書」であった．

私にとっては，このゼミは文書研究の何たるかを幸運にも先生に直接指導を賜ったばかりでなく，断片が多いトゥルファン文書を用いてどのような研究ができるのかヒントを頂いた有難い場となった．またここで培われた文書分析のノウハウが，後に森安氏と一緒に開講することになる大阪大学文学研究科での文書ゼミに十分に活かされている．

やがて池田先生たちの世代を継ぐ研究者たちが中心になり，日本における敦煌・トゥルファン研究のさらなる活性化を象徴する二つのグループ，すなわち森安・熊本裕・高田時雄・武内紹人・吉田豊の各氏によるヤントン（Young Tonkologists）と，關尾氏や白須浄真・町田隆吉・片山章雄らの各氏そして筆者による吐魯番出土文物研究会が結成されたが，どちらも池田先生のご研究や様々な学界活動から直接・間接に多くの学恩を蒙っている．

言うまでもなく，先生のご研究の主体は，広く言えば中国史研究としての唐代史や東アジア交流史にあるが，敦煌・トゥルファン文書の研究を専門とされたことから，敦煌やトゥルファンオアシスの個々の地域的な特徴やその歴史的な展開について検討され，内陸アジア史のオアシス研究にも多大なる貢献をされている．なかでも先に述べた『講座敦煌』の第 3 巻『敦煌の社会』は，敦煌の社会に焦点を据え，オアシスとしての社会的特質に責任編集者として光を当てられている．自らも「敦煌の流通経済」を執筆され，本論で先生は敦煌オアシスの経済的な変遷，とくに通貨の変遷や商人・胡商のあり方などについて，かなり詳細に概述されている．

先生の論著は注の部分まで揺るがせにせず注意深く読み込んで行く必要があることは，先生のご高論に触れたことのある方ならば誰しも感じられているところであろうが，本論でも唐の漢人商人が多くを占める行客の肩書をもつ康仁希の名のところに，「彼の押は朱で書かれていて漢字ではなく，ソグド文字の略記のように見える」と注を付けられている．後ろにまとめられた細かな注なので，ややもすれば見過ごしてしまいそうなところであるが，中華世界内部に取り込まれたと見られる行客ソグド人の漢人世界への定着実態をうかがうのに大変重要な発見となろう．

このほか，敦煌のソグド人集落に関わるペリオ文書を徹底的に分析し尽くしたご高論「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」(『ユーラシア文化研究』1, 1965, pp. 49–92．のち『唐史論攷――氏族制と均田制――』汲古書院, 2014年所収）は，内陸アジア史研究の論攷としても大変に意義深いものがある．当時のソグド研究の成果に拠られて羽田明先生が，「ソクド人の東方活動」(『岩波講座 世界歴史』6）をまとめられたのが1971年であったので，本論文が1965年の公表であったことは，ソグド研究の流れから見れば早々と突出した研究成果を出されたことになる．ソクド人聚落の内実や動向，ソクド人名のあり方などを伝える豊かな資料を提供され，以降のソグド研究を大きく進展させるメモリアルな論攷となったと評価できよう．惜しむらくは，この出色のご高論がすぐには内陸アジア史研究者に認知されなかったことである．

他方，トゥルファンオアシスに関しては，均田制のご研究に関連して当地の土地管理についてコメントされることが多かったが，口頭報告ではあるが，1982年度の史学会大会，東洋史部会において「麴氏高昌国土地制度の性格」と題して行われたご報告は，独立オアシス国家である麴氏高昌国の支配の性格を明確に指摘した大変に重要な内容であったように思う．先生は，高昌国王が土地に対して巨大なる直接支配権を有し，その結果として某人の田園を別人に給与していたことや土地の所有移転に必ず王の許可を必要としたことをトゥルファン文書を使われて指摘された．そして，この事実を踏まえ，高昌国を征討して設置した西州都督府で導入された給田制（均田制）が，こうした前代の状況を踏まえていたこと，さらに漢兵の屯田に始まるトゥルファン盆地の伝統との関係を推定されたのである．結局は，論文にされることはなかったが，トゥルファンの歴史的な展開についての重要な視点を提供されている．

先生が敦煌やトゥルファン文献について，漢文文書に限定されているとは言え，その録文を史料として扱えるレベルにまで整えて頂いたことは，内陸アジア史の研究，とりわけてもオアシス地域史の研究を大きく進めることになった．さらに，敦煌・トゥルファン以外の中央アジアから出土した文書も広く検討されており，その関心はコータンやクチャといったオアシスに及んでいる．ただ大変に残念なのは，敦煌・トゥルファン出土の漢文文書については，かなりの部分の録文を公表しておいて頂いているが，クチャやコータンなどのオアシスから出土した漢文文書の録文については，「麻札塔格出土盛唐寺院支出簿小考」(『段文傑敦煌研究五十年記念文集』北京 1996, pp. 207–225）で扱った一部のコータン文書を除いてその多くを公表されていない．実際に先生がクチャやコータン出土の漢文文書について自ら録文を作られていたことは，私が一時的にお預かりしていた先生の文書の録文を書き留められていた資料の存在から明らかである．

この資料というのは，先生が東文研在職時代に作成された敦煌・トゥルファンなどの文書の写真と録文を整理された，一連の資料群のことで，一枚一枚の文書を対象として，A3判の厚い一枚紙にその写真と録文を，コピー添付したり書き込まれたりされたもので，写真の典拠や他の録文があればそれも記録し，さらに関係論文などの付記もあり，大変に便利なものである．文書の対象も，それこそ敦煌・トゥルファン文書のみならず，クチャやコータン，ソグディアナのムグ山関係の漢文文書などもあった．私がお預かりしていたのは，先生が東文研を退官された後，1992年から1993

年の間，北京の日本学研究中心の日方主任教授として赴任されていた時であった．今は，残念ながらその所在は分からなくなっているが，後に池田先生が録文作成に協力して刊行された Éric Trombert, avec la collaboration de Ikeda On et Zhang Guangda, *Les manuscrits chinois de Koutcha. Fonds Pelliot de la Bibliothèque nationale de France* (Paris: Institut des Hautes Études Chinoises du Collège de France, 2000, 150 p +54 pls.) に，その資料の一部は活かされているものと思われる．

最後に先生との個人的な思い出をつづることをお許しいただきたい．先生は，冒頭に述べたように学問的な議論の場では，駆け出しの院生であろうとも，その見解や論文を軽く見ることはされず，高名な研究者と分け隔てることなく評価された．おそらく，そうしたお考えのもとに，1983 年に日本で開催されることになった国際アジア・北アフリカ人文科学者会議（The 31st International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa）で，当時，研究者としては無名の私に報告するようにお誘い頂いた．私はちょうど早稲田の博士後期課程に進級したばかりの院生であり，東大の池田ゼミに出席し始めた頃のことであった．ところが，これがある関西の重鎮研究者を怒らせることになり，何と私に直接ではなく早稲田の指導教員を通じて報告を断念するように求めてきたのである．私は，そのことで大変に悩みぬいたが，結局は報告を取りやめにしようと決め，池田先生にそのことをご報告しに東文研までうかがった．私がそのことを先生にご報告すると，いつもは柔和な面持ちで話を聞いて下さるのに，その時はそれまで見たことのないような厳しい表情をされ，「ここで報告を断念することは，今後の学界のために決して良くなく，絶対に報告を止めるべきではない」と語気を強めて私を諭された．先生は，さらに私を鼓舞するためか，私に報告を辞退するように求めた相手を指して「天皇陛下でもあるまいし，何ということはありません，まったく気にしないで報告してください」と半分冗談を込めて笑顔で話された．それでようやく国際会議で報告する意を決することができた次第である．今となっては，懐かしい良い思い出となったが，今でもあの時の先生の毅然とした姿勢とお顔を忘れることはできない．先生から授かった学恩とともに，学問研究に対する純粋で真摯な姿勢を私に指し示して下さったことに深く感謝しています．

合　掌